

原著論文

学級集団の実践コミュニティ化に関する実践的試論

—— 社会力を高めあう学級づくりモデルの構築 ——

廣 部 恵 子[†]

Implementing Communities of Practice in the Elementary School Classroom

— A Model for Cultivation of Enhanced Social Competency Classroom Environment Enrichment —

Keiko HIROBE

キーワード：社会力, 実験コミュニティ, 学級集団, 発展, 学習モデル

1. は じ め に

人間関係の希薄化が言われて久しい。核家族化や、地域での人間関係の希薄化、家庭内におけるプライベート化の進行など、対人関係経験の少なさは、今の子どもたちの人との関わり方や関係の築き方において問題を呈している。また、幼い頃からの遊びの経験不足など、みんなと一緒に何かをする経験の少なさも、子どもたちの人間関係を構築する力の弱さの一因であるように思われる。

子どもたちの学校での様子を見ても、思いの行き違いや自分の思い込み、あるいは自分の思いが伝えられずにトラブルになることが多く、学年が小さいほど、教師が間に入ってそれぞれの思いを聞き合い、やりとりの橋渡しを丁寧にいき、解決の方法を伝えていくことが日常茶飯事である。また早くから放課後の遊びの予約をするなど、少人数の仲よしグループに所属する

ことに苦心し、外には開かれていないグループの内向性や、他のグループやクラスメートへの関心や関わりの低さも感じられる。更に、言われたことにはまじめに取り組むことができるが、自分たちで工夫をしたり、友だちや、学級、学校のためによいと思うことを新たに考え実践したりする力の弱さも感じられる。

社会生活の大部分は、集団を基盤にした関係で成り立っている。また人間の学習と成長は、個人的過程であると同時に、自分が所属する社会の中で人と関り、その人々と共に行動することで学習し、成長していくといえる。社会の中でよりよく生き、学んでいくためには、それぞれの集団とそこで展開する諸活動や人間関係を、メンバーが望ましいと感じられるように考え行動したり、それらに肯定的に関与したりできるような力が大切であり、そのような力を育てていくことが今の子どもたちには必要である。

本研究では、子どもたちが生涯にわたって社会と肯定的に関わり、成長を続けていくことのできるための力を培っていくための方途を、子どもにとって大きな社会である学級の集団性を転換させていくことから実践的に追及していく

[†] 学校教育専修 学校教育専攻
指導教員：紅林伸幸

ものである。

2. 社会力を育む実践コミュニティ

(1) 子どもに育みたい社会力

子どもたちが生涯にわたって社会と肯定的に関わり、成長を続けていくことのできるための力とは、門脇厚司氏によると、「社会力」であるという。社会力とは「人が人とつながり、社会を作る力」(2010, p. vii) のことであり、様々な人たちと良い関係をつくることができ、つくり上げたい人間関係を維持しながら、それまで自分が学んで身につけた知識や、努力して習得した技術や技能などを、自分が生きている社会で、誰かのためにあるいは何かのために役立てようと、自分から進んで発揮し、活用する力であり、自分の意思で社会の運営に関わり、社会の一員として何らかの役割を果たす力のことであるという。

この社会力のおおもととなっているのは、「ヒトの子が自分以外の人間（他者）に対して関心と愛着と信頼を持つこと」(1999, p. 95) である。それは人の顔を見分けたり、声を聞き分けたり、人の心を推察したりといった、人間が先天的に備えている高度な能力を発揮させることで、他者との相互行為を開始し、相互行為を繰り返していくことで培われる。そして、相互行為を続けることで社会的要素を共有していく。更に「身に付けた社会的要素を使って社会生活を続ける中でそれらをよりよく安定したものに修正していく」(同上書, p. 102) ことで社会力を形成していく。

また、社会力の基盤には「確かな他者認識と他者への熱い共感能力」(同上書, p. 102) が必要であり、このような基盤があるからこそ、常に誰かに関心をもち、他者との相互行為が生まれる。その相互行為を繰り返すことで社会力を形成し、その社会力を発揮しながら相互行為を行うことで更に社会力を培うというサイクルが重要なのである。

門脇氏は、上記のような社会力を発揮するためには、その社会に凝集性が必要であるという。凝集性のある社会にするためには、その社会を構成するメンバーが互いに関心と愛着と信頼感

をもっていること、一緒に何かをできることの喜びを感じていること、所属意識の高さ、社会を成立させている要素や社会のイメージの共有をしていることが必要である。まさにメンバーが社会力のおおもとや要素を持ち合わせていることが必要であり、社会力のある社会の中でこそ社会力が培われ、発揮されるということである。

そこで、様々な人との相互行為や、共同体験を効果的に行うことで、学校の中の社会に凝集性を生み出し、社会力を発揮できる場を作れば、その社会の社会力が高められ、そこに所属する子どもたちの社会力も養われるのではないかと考え、学校における社会を転換させることから社会力を高める方途を探っていくこととした。

(2) 実践コミュニティ

学校という社会に凝集性を生み出し、子どもたちの社会力を高めるための一方途として着目したのが、学級の実践コミュニティ化である。

実践コミュニティとは、ウェンガーらによれば「あるテーマに関する関心や問題、熱意などを共有し、その分野の知識や技能を、持続的な相互交流を通じて深めていく人々の集団」(Wenger et. al., 2002, 邦訳 p. 33) と定義される。一緒に時間を過ごししながら、情報や洞察を分かち合い、助言を与え合い、協力して問題を解決するものであり、共に学習することに価値を認めている集団のことである。

実践コミュニティであるためには、一連の問題を定義する知識の「領域」、この領域に関心を持つ人々の「コミュニティ」、そして彼らがこの領域内で効果的に仕事をするために生み出す共通の「実践」の3つの要素が必須であり、重要なのは、これらの三要素を並行して発展させることである。実践コミュニティは、実践にメンバーが参加し、実践を積み重ね、課題を乗り越えていくことで、「潜在」「結託」「成熟」「維持・向上」「変容」の5つの段階を経て発展する。各段階の課題とコミュニティを発展させるための活動は表1の通りである。

実践コミュニティを発見し、意図的に発展を促すことで、実践を通じてメンバーに知識やスキルを伝達するだけでなく、新たな知識を創出

表1 各段階の話題とコミュニティが発展を促すためにとるべき行動

発展段階	課題	コミュニティが発展を促すためにとるべき行動
潜在	メンバー間に十分な共通点を見出す	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニティの目的を決め、領域を明確にする ・コミュニティのメンバーを結びつける ・コミュニティの初期設定を作る
結託	コミュニティが一つになるために必要な活力を生み出す	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニティのイベントや空間を創始する ・共有する価値のあるアイデア、洞察、実践をみつける ・メンバーの間につながりを築く ・コミュニティの価値を実証する
成熟	コミュニティの焦点、役割および境界をはっきりさせる	<ul style="list-style-type: none"> ・実践を体系化しつつも助け合うための相互交流を維持する ・領域を発展させる（「知識ギャップ」の特定と学習課題の設定）
維持・向上	勢いを持続させる	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニティの焦点を広げ、実践を活性化させる
変容	遺物という形で残す	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニティを打ち切ってもいかに続ける方法を見つめる

することができる。更に、コミュニティは、学習する社会的構造を生み出し、強く結びついたコミュニティでは、メンバーが互いを尊重し信頼しているために、相互交流が活発で、豊かな関係が生まれる。そして人びとの間に関係を築き、帰属意識を醸成し、探究心を引き出し、メンバーに専門家としての自信やアイデンティティを与える。

コミュニティを育成し、発展させるためには参加を誘発し、促すことが大事である。実践コミュニティにおける学習は、状況に埋めこまれている学習であり、それは正統的周辺参加というプロセスをもっているからである。実践コミュニティにおける学習は、参加という枠組みで生じる過程であり、実践に参加すること自体が学習なのであり、実践コミュニティへの参加の度合の増加とみなされる。したがって、いかに参加を促すか、参加の質を高めるかが一人ひとりのよりよい学習に関ってくるのである。コミュニティのメンバー一人ひとりがよりよく実践に参加し学習することが実践の質を高めることになり、実践コミュニティを育成し、発展させるためには重要になってくるのである。

(3) 学級の実践コミュニティ化

学校生活の大半を同じメンバーで過ごす「学級」に実践コミュニティを見出し、コミュニティを発展させることで、相互交流が活発になり豊かな関係が生まれたり、コミュニティへの帰属意識が高まったりするなどといった価値がもたらされれば、学級が凝集性のある社会となり、社会力を発揮できる場となると共に、社会力を培う場となることが期待できる。

学級を実践コミュニティ化することとは、「コミュニティ」のメンバーである学級のメンバーが、自分たちの関心や問題から「領域」を発見し、その領域に向かって協力して実践を行っていく集団として捉えるということである。実践を行っていく際に自分の知識や技術や経験を出し合い、相互交流をすることで共通の理解や、「実践」への取り組み方法を生み出す。その過程で、帰属意識やメンバーへの信頼感を築いていく。つまり、子どもたちは「ともに実践する者」であり、実践に参加することで相互交流の仕方、実践への取り組み方や解決の仕方を学んでいく。そして更に変化する「領域」（自分たちの学習課題）に共同で取り組み「実践」を重ねていくことで、学級実践コミュニティを発展させ、学級集団の凝集性、社会力を高めていくのである。それぞれのメンバーが社会力を発揮しながら学級という社会での仕事の遂行に寄与することのできる存在になり、更には学級の変容に関わっていける存在になっていくことができたとき、メンバーの社会力が高まっていることが期待できる。

3. 実践コミュニティを発展させるための学習モデルの構築

学級を実践コミュニティ化し発展させるために、学習モデルの構築を試みることにした。構築にあたっては「ジャスト・コミュニティ」、「修復的实践」、「アサーティブ・ディシプリンを用いた実践」、「学びの共同体」のコミュニティ形成の実践について調べ、そこから示唆を得ることを目的とした。それぞれのコミュニ

表2 各コミュニティにおける領域、コミュニティ、実践の比較

	実践コミュニティ	ジャスト・コミュニティ	修復的实践	ハイフィールド・ジュニアスクール	学びの共同体
領域	コミュニティが共通の関心をもって探求する分野や範囲	正義に基づいたコミュニティ形成と道徳的行為の高まり	協働的な関係性	モラルや社会性の発達による行動改善, ウェルフェア	自律的な連帯, 連帯を通しての自律・自律的学習
コミュニティ	性格 実践することで影響を与え合い, 共に学習し, 関係を築き, その過程で帰属意識や互いに対するコミットメントを築いていく	学校を民主的に運営することによって, 連帯感情, 仲間意識, 責任感, 規範に対する意識などを高め, 道徳判断と行為の一致を高めていくとするもの	集団による課題解決, 仲裁・調停, 対人関係の形成に関する知識やスキルを学び, 実践することで学校の福祉を向上させて, 健全で安全な環境, 共同的な関係性を作り上げる	アサーティブ・ディシプリンを用いた行動マネジメントを身に付けることにより, 自分の行動に責任をもち各自のウェルフェアが推進される	一人ひとりが主人公となってその権利を実現し, 責任を担う。最上のものを追求する。学びを通して〈絆〉を築くことにより, 他者に対する寛容の精神と多様性を尊重する
	発展性 有	有 (弱)	有 (弱)	有 (弱)	無
実践	コミュニティが生みだし, 共有し, 維持する特定の知識	共感的な人間関係の中での正義によって方向づけられた合意(ルール, 正義に貫かれた環境)	・学習の場としての学校の秩序や安全性 ・関係の修復	・行動の枠 ・ピア・サポート(仲間同士による支え合い)を通しての問題解決	学びとケアの倫理と作法

ティがどのような領域や性格をもち, 相互交流によって何が生み出されているのか(実践), そしてどのようにして自治的な活動が行われていくのかを比較分析することにより, 実践コミュニティを発展させるための学習モデル構築の手がかりとした(表2)。

各コミュニティの比較分析に基づいて, 実践コミュニティを発展させるための学習モデルは, 以下のことを踏まえて構築することとした。

- ・教師と生徒は学級実践コミュニティのメンバーであり, 共に実践する。
- ・コミュニティメンバーに共有された関心, 問題は何かを相互交流をし, 領域を見つけ出していくと共に, 実践の方法を考え, 実践を繰り返し行っていくことでコミュニティを発展させていく。
- ・コミュニティを固定したものと捉えず, また様々なレベルの参加を認めながらも, 参加の質を高め, コミュニティ自身の中にある方向性や特性, エネルギーを引き出すように設計する。
- ・小集団内で対話の習慣をつけ, 小集団を全体としてのコミュニティと関連付けることで, 全員参加型のコミュニティづくりを目指す。
- ・相互交流の際には, 課題達成・問題解決の

視点と, ケア・修復の視点をもちながら行う。

- ・実践に参加しながら, 課題解決の方法や対人関係に関するスキルを学ぶ。

実践コミュニティを発展させるための学習モデルにこれらの視点を組み込むことで, 学級コミュニティを, 社会力を発揮することのできる環境に意図的に変換させ, コミュニティの発展を促す。

また, 学級を実践コミュニティとして捉え, 発展させていくためには, 学級が実践コミュニティとして今どの段階にあり, どのような課題を乗り越えることが必要なのかを見極め, 発展を促す働きかけを行っていくことが必要である(表3)。

表3 実践コミュニティの各発展段階と実践コミュニティ化された学級の姿

段 階	実践コミュニティ化された学級の姿
潜 在	・メンバー間の共通点を発見している
結 託	・助けが必要な時には話し合っている ・参加への価値を見出している(貢献する価値, 他の人々の経験から学ぶ価値)
成 熟	・助け合うための相互交流を維持している ・自分たちで領域を発見, 発展させている
維持・向上	・新しいテーマやアイデア, ものの見方を取り入れ実践を活性化させている

表4 実践コミュニティを發展させるための学習モデル

学習段階	⇒ 発 見	⇒ 構 想	⇒ 実 践	⇒ 評 価
学習活動	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の問題の発見 ・学級の学習課題の発見 	<ul style="list-style-type: none"> ・実践の内容を決める ・実践の方法を決める 	<ul style="list-style-type: none"> ・経験する ・学級の作品（実践）を作る 	<ul style="list-style-type: none"> ・知識を体系化する ・価値を認識する ・作品を共有する
働きかけ	<ul style="list-style-type: none"> ・学習全体を見通せるようにする ・個々の興味・関心を共有できるようにする ・学級の学習課題を決め、領域を明確化する 	<ul style="list-style-type: none"> ・実践のどの部分にどのように参加するのかがはっきりできるようにする 	<ul style="list-style-type: none"> ・次の3段階の時間を有効に設定する ①様々なレベルのメンバーによるグループ活動の時間：グループタイム ②グループ間の情報交換の時間：フリータイム ③実践を共有する時間：クラスタイム 	<ul style="list-style-type: none"> ・問題解決して分かったこと、新しく分かったことをまとめられるようにする ・実践してよかったことを出し合えるようにする ・実践してきたことを作品として位置づけ共有できるようにする ・新たな問題に目を向けられるようにする
育てたい社会力	他者への共感イメージの共有	自分の役割、友だちの役割の理解	相互交流の力 協働する力	ことばの意味や状況に付された意味の共有 コミュニティの価値の認識

上記のようなことを踏まえて作成した実践コミュニティの發展を促すための学習モデルが表4である。

単元の学習を「発見」→「構想」→「実践」→「評価」という段階に分けて展開していくことにより、コミュニティが一つの実践を行えるようにした。また、この一まとまりの実践を繰り返して行っていくことにより、コミュニティを發展させ、実践への参加の仕方、協働の仕方を学び、学級という実践コミュニティでのシゴトの遂行に寄与していく力を養っていくことを目的としている。

「発見」の学習段階では、自分の学習問題を捉えさせ、それらを共有した上で、学級が取り組む実践の領域＝学習課題を発見することが必要である。そのためには学習全体が見渡せるようにすること、それぞれが何に興味関心を持っているのかを共有した上で自分たちがこれから取り組む課題を決定できるようにすることが必要である。

「構想」の学習段階では、実践の内容や方法を決定することが必要である。そのためには、これから行う実践のイメージを共有し、自分は何の部分に、どのように参加できるのかが明確になるようにすることが大事である。自分の役割を明確にして取り組むことができるようにすることを重要視している。

「実践」の学習段階では、共同体験をし、学級の作品（実践）をつくっていくことが必要で

ある。そのためには、相互交流の場を十分に確保することが重要である。グループ活動の時間はもちろんのこと、グループ間の情報交換の時間や、学級全体で実践を共有する時間などをうまく取り入れながら、実践をつくり上げていくことが必要である。またその中で、メンバーへの理解が進んでいく。

「評価」の学習段階では、自分たちが行った実践、つくり上げた作品（実践）についてふりかえり、価値を認識したり、作品を共有したりすることが必要である。問題解決して分かったことや新しく分かったことをまとめたり、実践してよかったことを出し合ったりすることで自分たちが行ったことを一つの作品として位置づけ、積み重ねていくことが重要である。実践の積み重ねは、次の領域の発見を生み、次の実践へとつながるものである。

上記のようなことを踏まえ、学級実践コミュニティは「発見」→「構想」→「実践」→「評価」という展開を繰り返しながら実践を積み重ねていくわけであるが、実践コミュニティを發展させるためには、各發展段階の課題を乗り越えなければならない。各段階に応じて必要な働きかけを十分に意識して単元展開に組み込み、学習活動を組み立てる必要がある。

またこの学習モデルは学級実践コミュニティを發展させ、凝集性を高めることで子どもたちの社会力を発揮できる場を作り、学級の社会力、そして個々の社会力を高めることを目的として

いる。実践の過程において、子どもたちの社会力を構成するあらゆる面を培うことを意識しておくことも重要である。

この実践コミュニティを発展させるための学習モデルを実践し、学級の社会力の高まり、個々の社会力の高まりについて検証することとした。

4. 学級実践コミュニティを発展させるための学習モデルの実践・検証

先に示した学級実践コミュニティを発展させるための学習モデルを、小学校第2学年図画工作科の授業において2度に渡って実践した。学級を実践コミュニティ化し発展させることで、学級コミュニティが変容し、学級全体の社会力、個々の子どもの社会力が高まったのかを検証すること、その上でモデルを精緻化することを目的とした。児童の社会力については、学研版《小学生白書》2000-2001版「子どもの社会力を測る20の質問項目」を利用し、測定を行った。20項目の合計得点を社会力得点として見るものであり、社会力の高まりを検討する一つの材料とした。

実践学級はまだメンバー間の共通点を発見し、コミュニティになるための結びつきを作ってい

る「潜在」の段階にあると考えられた。まずは、実践を行うことで、相互交流を増やし、それぞれのことを知り、結びつきができるよう、学習モデルにおける「実践」の部分に重点を置いた学習プログラムを組み立て、実践を行うこととした。

実践1は、「お話を絵に表そう」という絵画教材全8時間の単元で行った(表5)。

実践の結果、描画方法別のグループの実践コミュニティは生まれたものの、それを学級の実践コミュニティの形成にまで広げることができなかったため、本学級コミュニティメンバーの理解を更に深め、学級実践コミュニティとしてのつながりを作り、「結託」の段階に発展させることはできなかった。

それはまず、参加の度合いが低かったことが挙げられる。個人の作品を仕上げる実践であったために、コミュニティの必要性が個々の児童にとっても、学級全体にとっても低いものとなってしまった。また領域も、グループにおいては、「ドリップングを成功させよう。」などという、もう一つの領域が設定され、われわれ意識を高めることができたものの、学級全体の領域としては曖昧で、学級コミュニティへのわれわれ意識を高めたり、学級としての実践への参加度を高めたりするものにはなっていない

表5 単元名「お話を絵にあらわそう」全8時間 単元計画

学習段階	学習活動		発 問	予想される児童の反応
発見 (1時間)	・自分の問題の発見 ・学級の学習課題の発見	・お話をきく ・おはなしをきいて思ったことを話し合う。(グループ) ・全体で交流する ・学習課題を発見する	「お話を聞いて、心に留まったこと、気になったこと、思ったことは何ですか？」 「これからどんな絵を描いていきたいですか？」	・〇〇がおもしろかった。 ・〇〇がふしぎだった。 ・面白かった場面の絵 ・心に残った場面の絵
構想 (1時間)	・実践の内容を決める ・実践の方法を決める	・何を使って描くのか ・どのような技法を使うのか	「どんな方法を使えば思いにあった絵がかけると思いますか」	・にじみ ・パチック ・スパッタリング ・ドリップング
実践 (5時間)	・経験する ・学級の作品(実践)を作る	・技法別のグループに分かれて取り組む G・よりよく描ける方法を考える F・情報交換 C・描き方の交流		G: どうしたらうまく色がつくのかな。 F: その方法も使ってみたいな。 C: 〇〇の技法を使うとやさしい感じがするな。
評価 (1時間)	・知識を体系化する ・価値を認識する ・作品を共有する	・描き方の共有 ・友だちの作品のよさの共有 ・協力して取り組んだことの価値の認識	「友だちの作品のどんなところがよかったですか。」 「友だちに教えてもらったことはありましたか。」	・〇〇さんの絵はスパッタリングがあっていたな。 ・〇〇さんに教えてもらってうまくいった。 ・みんなですると楽しいな。

表6 単元名「ならべて つないで つつんで」全4時間 単元計画

学習段階	学習活動	発 問	予想される児童の反応
発見 (1/2時間)	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の問題の発見 ・学級の学習課題の発見 	<ul style="list-style-type: none"> ・それぞれがイメージしたことを話し合う。 ・学習課題を発見する。 	<ul style="list-style-type: none"> 「机を並べたり、つなげたりして2年A組の秘密基地を作ろう。どんな秘密基地を作りたいですか。」 ・大きな秘密基地を作りたい。 ・いろいろな秘密基地を作りたい。 ・森の中の秘密基地を作りたい。 ・2年A組の秘密基地は、森の中の基地で、いろんな秘密基地がつながっているのにしよう。
構想 (1/2時間)	<ul style="list-style-type: none"> ・実践の内容を決める ・実践の方法を決める 	<ul style="list-style-type: none"> ・何が必要か（材料） ・どのように並べたり、つないだり、つつんだりするか。 	<ul style="list-style-type: none"> 「秘密基地を作るには何が必要ですか。どのように並べたり、つないだり、つつんだりしますか。」 ・机は同じ数ずつ分けよう。 ・ダンボールも欲しい。 ・机を丸く並べよう。
実践 (5/2時間)	<ul style="list-style-type: none"> ・経験する ・学級の作品（実践）を作る 	<ul style="list-style-type: none"> ・関心別のグループに分かれて取り組む G：イメージした基地に近づくための並べ方やつなぎ方などを考える。 F：情報交換 C：みんなで遊ぶ 	<ul style="list-style-type: none"> ・グループで並べ方やつなぎ方を話し合い、協力しながらつくる。 ・他のグループからの情報を取り入れる。
評価 (1/2時間)	<ul style="list-style-type: none"> ・知識を体系化する ・価値を認識する ・作品を共有する 	<ul style="list-style-type: none"> ・作り方の共有 ・友だちの作品のよさの共有 ・協力して取り組んだことの価値の認識 	<ul style="list-style-type: none"> 「いいなと思った並べ方やつなぎ方をしていた基地はありましたか。」 「2年A組の基地作りをしてよかったことはありますか。」 ・様々な並べ方やつなぎ方のよさについて知る。 ・友だちの作品のよさについて知る。 ・みんなで協力したらうまくいった。

かった。このことは相互交流や実践の共有に関しても同じである。グループ間での相互交流は行われたものの、グループを超えての相互交流を活発化させたり、実践を学級全体で共有したりすることができていなかった。そのため、友だちと一緒に実践に取り組むことの価値の認識を高めることができなかったと分析する。

学級の社会力についても実践前の7月と実践後の10月の社会力得点において平均値の比較を行ったが、変化は見られなかった（両側検定： $t(16)=0.58$, $p>.05$ ）。しかし、グループの実践コミュニティ化による協働、相互交流の経験の一つ積めたことで、個々のつながりをつくり、相互交流しやすい環境を整えていけたと言える。そのことにより、社会力における「友だちと関わっていこうとする力」、「関係が崩れたときには修復しようとする力」の面が高まっていることが見出せた。そのような学級の相互交流を行う力の高まりと共に、個々の児童の相互交流をしようという意欲や力も高まってきていることが考えられた。本学級の、そのような面での力の高まりを生かし、相互交流を活性化

させること、領域を明確化させること、実践の価値を実感できるようにすることを次の実践の課題とした。

実践2は、「ならべて つないで つつんで」という、材料を基に造形遊びをする活動全4時間の単元で行った（表6）。

実践1の考察を踏まえ、学級実践コミュニティの実践として意識できるよう、グループでの共同作品作りを課題とすることにした。結果、本学級のメンバー同士がつながり、学級実践コミュニティとしてのまとまりができつつあることの推測はできたが、コミュニティを「結託」の段階にまで発展させることはできなかった。ただ、グループ実践コミュニティの実践への参加の度合い、参加の質を高めることはできたと考える。学級の社会力に関しても平均値の比較の結果、変化はみられなかったが（両側検定： $t(16)=0.02$, $p>.05$ ）、今回の実践で「提案」や「共有」の相互交流が見られたように、学級に相互交流をする力がついてきており、それにつれて、個々の児童の相互交流も多く行われていることが考えられた。また、表情から気持ち

を読み取ることはまだ難しいけれども、相互交流を重ねる中で、友だちの言おうとしていることを読み取ったり、友だちのことを理解しようとしたりする力がついてきていることも伺えた。

しかし、学級実践コミュニティを發展させ、学級全体の社会力を高めるためには、あくまで学級実践コミュニティの実践を行い、その実践をコミュニティが認識し価値付けていくことが必要である。グループの実践コミュニティの実践をどのようにつないで学級実践コミュニティの実践にしていくのかを更に検討することが必要であり、今後の課題として残った。

5. 学級実践コミュニティを發展させることによる社会力の高まりへの成果と課題

学級を実践コミュニティ化し、その学級実践コミュニティを發展させるための学習モデルに基づき、2回の実践を行ってきた。2回の実践から見えてきたことは何なのか、比較して考え、本学習モデルが学級の実践コミュニティ化やその發展に有効であったのかを検討する。比較するにあたっては、学級の実践コミュニティ化の4つの視点から行うこととする。そして、学級の社会力、個々の社会力の高まりについても検討した上で、学習モデルの精緻化を試みる。

(1) 実践への参加

実践コミュニティでは、様々な形の参加を奨励している。しかし、実践2の方が参加の度合いが高かった。

その違いは、実践2のコミュニティには、「役割」が生まれていたというところにあるように思われる。実践1では、領域がみんなの領域として共有されていなかったために、実践も個人のものとなってしまっていたきらいがある。そのため、コミュニティ内での自分の役割は生まれにくかった。

一方、実践2では自分たちが行うこと（領域）がはっきりしていたために、その中で自分は何をしていくのかを考える必要が生まれ、それぞれが見つけた役割を果たすことで、参加の度合いも高まった。また、実践2では、それぞれの役割が他のメンバーに認められていた

ことも大きなことであった。子どもたちは自分ができることを考え実践し、助けが必要なときには助けを求めたり、それに誰かが応答したりしながらそれぞれの基地を作り上げていった。そしてどの役割も基地づくりの一部として受け入れられていた。実践コミュニティが様々な参加を奨励するということは、つまりは、実践コミュニティのメンバーが、他のメンバーの役割を認めるということである。そしてそのことがメンバーを内に向かせることになり、参加の度合いを高めるポイントになる。

(2) 領域の共有

領域の共有は、コミュニティの実践の方向性を決め、コミュニティに一体感をもたらすものである。どちらの実践においても、子どもたちと話し合っただけで学習課題（領域）を決め、実践を始めた。しかし、実践2の方が、子どもたちにはわれわれ意識があり、「自分たちは」何をしていくのかという目的がはっきりしていたように思われた。その違いはどこにあったのだろうか。

確かに、個人の作品作り、グループの作品づくりという違いはあっただろう。しかし、個人の作品作り、あるいは体育科の学習の個人の技術の取得のような学習課題の場合には実践コミュニティの実践が行えないということはない。個人の作品作り＝個人の課題としてしまうのではなく、個人の作品作りを通して実践コミュニティが何を実践するかという視点をもつことで、実践コミュニティの実践に成り得ると考える。そのために領域の共有が必要なのであり、あくまでコミュニティとしての領域設定、つまりはみんなで学習課題（領域）を解決するという視点の領域を設定することが必要だったのではないだろうか。その意味で、実践1の領域は、自分で解決する課題ともなってしまう、子どもたちにとって、コミュニティの領域としての認識につながりにくかったのである。

(3) 相互交流

学級実践コミュニティの学習によって習得していくことは、学級としての価値あるシゴトにその子なりに参加し、仲間と協働して、そのシ

ゴトの遂行に寄与していける力である。学級としての価値あるシゴトを遂行するためには相互交流に参加していくことが必要であり、相互交流を活性化させることが学習の質の高まりにつながる。

2つの実践から実践を活性化させるために重要であると思われた相互交流は、「提案」と「共有」の相互交流である。提案の相互交流は自分の考えを一方的に伝えるのではなく、「〇〇はどう？」というように相手の考えも聞こうとする相互交流である。また、「共有」の相互交流は、「これは〇〇だよ。」「これは〇〇ということ？」というように、自分のしていることや友だちのしていることを確認し合い、理解し合い、共有するための相互交流である。提案の相互交流によって協働が生まれ、共有したことをつなげていくことでそれぞれの行っていることがシゴトとしてつながり、遂行され学級の実践となる。

このような相互交流を活性化させるためには、何が必要であるのか。それは、やはり領域がみんなて解決することとして共有されていることである。自分が解決すればよい領域であるならば、相手に提案し、お互いにとってよいものにする必要はないし、自分のしていること、相手のしていることをつなげる必要もないからである。コミュニティにとってどうなのかと、自分のしていることやしようとしていること、相手のしていることを照らし合わせることによって、相互交流が生まれるのである。また、照らし合わせる必要があるからこそ、相互交流が必要だとも言える。その意味で相互交流には他者への共感能力といった社会力のおおもとが必要であるし、社会的要素を共有する社会力のもとも必要である。そしてそのような相互交流を繰り返し経験することで、他者への共感能力や、社会的要素を共有する力が更に養われ、社会力が養われていくといえるのではないだろうか。

(4) 実践

実践1で生み出された実践は、困ったときには助け合う関係であったり、お互いの作品に影響を与え合う関係性であったりした。しかし、よりよい作品に仕上げるための方法を、共に追

求していくというようなところまでには高めることができず、メンバーみんなに共有された実践を生み出すことはできなかった。

実践2においては、みんなで領域を共有して「迷路の基地」を作っていくことにより、コミュニティの課題の達成のために自分の力を出していく価値や、協力する価値などを見出していくことができた。しかしそれは、基地グループによる小さな実践コミュニティ間で共有された実践にとどまってしまっていたとも言える。学級実践コミュニティ間で共有された実践にまで高めることはできなかった。

ただ、困ったときに助け合う関係性も、自分の力をコミュニティのために出していく価値、協力する価値の実感も、学級実践コミュニティの実践には必要不可欠なものである。本学級が、「潜在」の段階であるならば、これらの関係性の構築や価値の実感を積み重ねていくことは、学級コミュニティを発展させるためには大変重要である。

(5) 成果と課題

本研究の2回の実践では、本学級を実践コミュニティとして「潜在」の段階から「結託」の段階へ発展させることはできなかった。しかし、グループの実践コミュニティを生み出し、実践を行うことで、困ったときには助け合い、自分の力を出し、協力する経験を積むことができた。これらのことは、メンバー同士の関係をつないでいくことになり、「潜在」の段階のコミュニティが学級実践コミュニティとして一つにつながり、「潜在」の段階の課題を乗り越えるための土台となっていくものである。本実践のようなグループの実践コミュニティによる実践を繰り返し行い、相互交流や協働の経験、実践の共有を積み重ね、メンバーが互いに共通点をみつけるなどして理解し合い、それぞれの関係を結んでいくことが重要である。

しかし、グループの実践コミュニティによる実践だけでは、学級実践コミュニティを発展させていくことはできず、学級の社会力を高めることはできない。「学級実践コミュニティの実践」を行い、実践を共有していくことが必要である。いかに学級にあるグループのコミュニ

ティを学級実践コミュニティとして結びつけ、共有実践を行っていくかが、今回の実践から見えてきた課題の一つである。

また、「学級実践コミュニティの実践」を行うために必要なこととして浮かび上がってきたのは、①学級みんなで解決するという視点の領域②参加を促すための役割③共有を促す相互交流④実践のみんなでの共有、の4つの観点である。

これらの分析から、学級実践コミュニティを发展させるための学習モデルは、クラスの発展段階に併せて表4を柔軟に修正を加えながら実

践を構築していかなければならないものであることが分かった。つまり、学級を実践コミュニティ化させていく準備段階である第一段階で行う実践と、学級が実践コミュニティ化し、それを発展させていく段階である第二段階で行う実践とで段階をつけた実践を行う必要があるということである。

そこで、上記の4つの観点を組み込みながら、改めて学級を実践コミュニティ化し発展させるための学習モデルの修正を試みた。(表7)

学級を実践コミュニティ化させていく準備段階にある第一段階では、メンバーそれぞれの理

表7 クラスの発達段階に応じた学級を実践コミュニティ化させていくための学習モデル

第一段階における学習モデル				
学習段階	⇒ 発 見	⇒ 構 想	⇒ 実 践	⇒ 評 価 ⇒
学習活動	・自分の問題の発見 ・ <u>グループの学習課題の発見</u>	・実践の内容を決める ・実践の方法を決める	・経験する ・ <u>グループの作品(実践)を作る</u>	・知識を体系化する ・価値を認識する ・作品を共有する
働きかけ	・学習全体を見通せるようにする ・個々の興味・関心を共有できるようにする ・興味・関心に基づき、 <u>グループを構成するようにする</u> ・ <u>グループの学習課題を決め、領域を明確化できるようにする</u>	・実践のどの部分にどのように参加するか、 <u>イメージがもてるようにする</u>	・相互交流が円滑に行われるようにする ・自分の役割を見つけ、果たせるようにする ・次の <u>3段階</u> を有効に設定する ①様々なレベルのメンバーによるグループ活動の時間：グループタイム ②グループ間の情報交換の時間：フリータイム ③実践を共有する時間：クラスタイム	・問題解決して分かったこと、新しく分かったことをまとめられるようにする ・実践してよかったことを出し合えるようにする ・実践してきたことを <u>作品として位置づけ共有できるようにする</u> ・グループの作品を学級内の実践として位置づけるようにする ・新たな問題に目を向けられるようにする
育てたい社会力	他者への共感 他者理解 イメージの共有	自分の役割、友だちの役割の理解	相互交流の仕方 協働の仕方	ことばの意味や状況に付された意味の共有 協働する価値の認識

第二段階における学習モデル				
学習段階	⇒ 発 見	⇒ 構 想	⇒ 実 践	⇒ 評 価 ⇒
学習活動	・自分の問題の発見 ・ <u>学級の学習課題の発見</u>	・実践の内容を決める ・実践の方法を決める ・ <u>自分の役割を見つめる</u>	・「 <u>提案</u> 」と「 <u>共有</u> 」の <u>相互交流を行いながら協働する</u> ・ <u>学級の作品(実践)を作る</u>	・知識を体系化する ・価値を認識する ・作品を共有する
働きかけ	・学習全体を見通せるようにする ・個々の興味・関心を共有できるようにする ・ <u>みんなで解決していくべき学級の学習課題を決め、領域を明確化できるようにする</u>	・ <u>学級の学習課題を解決するために、自分はどこに関心があるのか、実践のどの部分にどのように参加できるのかははっきりさせ、自分の役割を持てるようにする</u>	・協働して自分の役割を果たせるようにする ・次の <u>2段階</u> の時間を有効に設定し、学級の実践を作り上げられるようにする。 ①役割グループごとの実践の時間：グループタイム ③実践を共有する時間：クラスタイム	・問題解決して分かったこと、新しく分かったことをまとめられるようにする ・実践してよかったことを出し合えるようにする ・実践してきたことを <u>学級の作品として位置づけ共有できるようにする</u> ・新たな問題に目を向けられるようにする
育てたい社会力	他者への共感 問題発見の力 イメージの共有	自分の役割、友だちの役割の理解	相互交流の力 協働する力 <u>役割遂行能力</u>	ことばの意味や状況に付された意味の共有 コミュニティの価値の認識

解を進め、メンバーを結びつけていくことと、メンバーをコミュニティの内側に向けていくことに重点をおいた実践が必要である（上段モデル）。

学級実践コミュニティを形成し、発展させていく第二段階においては、一つの実践コミュニティとしてまとめ発展させたり、更に「成熟」「維持・向上」の段階へと発展させたりするために、学級実践コミュニティとしての実践を積み重ねていくことに重点を置いた実践が必要である。そのために必要だと考えられる4つの観点、学級コミュニティみんなで解決するという視点の領域、参加を促すための役割、共有を促す相互交流、実践のみんなでの共有、をいかに組み込み、どのような手立てを講じるかといふことがポイントである。

また実践にそれぞれの社会力を持ち寄って参加することを通して、社会力のある学級に変換させると共に、個人の、学級の価値あるシゴトに寄与していける力＝社会力を培っていくことを目指すものである（下段モデル）。

また、第二段階の学習モデルの実践は、普段の授業による実践と、イベントによる実践とを組み合わせながら行うことでより効果が期待できると考える。特につながりができてきたコミュニティを学級実践コミュニティにし、「結託」の段階に発展させるためには、イベントは大きな威力を発揮する。普段の授業で実践を繰り返し行いながらコミュニティのメンバーのつながりを結んでいきつつ、イベントを打ち上げ、コミュニティをステップアップさせるということが必要なのではないだろうか。

本研究では、学級を実践コミュニティ化して社会力を発揮できる場と転換させ、学級の社会力を高めることで、個々の社会力を培うことを目的としてきた。実践コミュニティの実践に参加することで相互交流の仕方や協働の仕方を学ぶと共に、個々が今もつ社会力を発揮して役割を果たすことで、学級コミュニティがシゴトを遂行する。そうすることで学級の社会力が高まり、更にそこに参加する個々の、学級の価値あるシゴトに寄与する力＝社会力が高まることを目指すものであった。しかし、実践コミュニティの発展がどこまで起こっているのか、その

ことによって学級の社会力がどこまで高まったのか、また、学級の社会力を高めることによって個々の社会力がどこまで高まったのかを、どのように見取っていくのかについては整理ができていない。この点の整理が今後の課題である。

引用・参考文献

- 荒木寿友（2001）L・コールバーグの道徳論と共同体：ジャストコミュニティの分析を中心に、京都大学大学院教育学研究科紀要
- 荒木寿友（2002）L・コールバーグのジャストコミュニティの分析を中心に：対話のストラテジーに焦点を当てて、京都大学大学院教育学研究科紀要
- エティエンヌ・ウエンガー リチャード・マクダーモット（編）コミュニティ・オブ・プラクティス、野村恭彦監修（2002）翔泳社
- 岡田啓司（2009）人間形成にとって共同体とは何か―自律を育む他律の条件、ミネルヴァ書房
- 岡本光司 両角達男（2008）子どもの「問い」を軸とした算数学習、教育出版
- 門脇厚司（1999）子どもの社会力、岩波書店
- 門脇厚司（2002）学校の社会力、朝日新聞社
- 門脇厚司（2005）社会力がよくわかる本、学事出版
- 門脇厚司（2010）社会力を育てる―新しい「学び」の構想、岩波書店
- 熊本県教育委員会（2008）子どもの遊び実態調査
- 紅林伸幸（1994）学校改革論としてのコールバーグ「ジャスト・コミュニティ」構想―アメリカ道徳教育史の社会学的省察の中で―、東京大学教育学部紀要
- 佐伯胖 藤田英典 佐藤学（編）（1995）学びへの誘い、三陽社
- 佐伯胖 藤田英典 佐藤学（編）（1996）学び合う共同体、三陽社
- 佐藤学（1996）カリキュラムの批評、世織書房
- 佐藤学（2003）教師たちの挑戦―授業を創る、学びが変わる、小学館
- 佐藤学（2006）学校の挑戦―学びの共同体を造る、小学館
- ジーン・レイヴ エティエンヌ・ウエンガー 状況に埋め込まれた学習 正統的周辺参加、佐伯胖訳（1993）産業図書
- 竹原幸太（2007）修復的实践と道徳性の発達、早稲田大学大学院文学研究科紀要
- ハイフィールド・ジュニアスクール（編）学校が変わった イギリスで見つけた改革へのヒント、大出美知子訳（2000）現代人文社
- 古澤和行・桶田幸弘・弘中史子・寺澤朝子・今田聰吉田孟史（編）（2008）コミュニティ・ラーニング 組織学習論の新展開、ナカニシヤ出版

文部科学省（2008）小学校学習指導要領解説 図画
工作編，日本文教出版

山辺恵理子（2010）修復的正義から「修復的实践」
へー「修復的」であることの教育的意義の探
求一，東京大学大学院教育学研究科 基礎教
育学研究室 研究室紀要

山辺恵理子（2011）「修復的であること」という目
標が学校にもたらし得るものー修復的实践と
コミュニティ形成一，共生と修復（第1号），
共生と修復研究会